

冬の風物詩

鶺鴒祭

鶺鴒祭

鶺鴒祭神事は、毎年12月16日午前3時から羽咋市の気多大社で行われる。一对のろうそくだけが灯された神前で鶺鴒が放され、案上に止まるまでの動きによって新しい年の吉凶を占うものである。

祭りの起源は、気多大社の大神の大己貴命が、鶺鴒浦町の鹿渡島に上陸した際、阿於社（現・御門主比古神社）の櫛八玉神が鶺鴒となって御饗を捧げたことから始まり、大己貴命が羽咋に鎮座した後も鶺鴒浦から鶺鴒を運んで捧げたという故事に由来する。

鶺鴒は、鶺鴒浦町の鹿渡島に住む鶺鴒捕主任を務める小西家によって捕らえられる。鶺鴒捕りの方法は秘伝で、その技術は小西家の長男だけが受け継ぐこととなっている。捕獲された鶺鴒は、同じく鹿

渡島に住む21人の鶺鴒捕部とよばれる人々によって気多大社まで運ばれる。これは、三人ずつが毎年交代で二泊三日をかけ、約40キロの道のりを徒歩で運ぶものである。鶺鴒捕主任、鶺鴒部とも世襲制で、いずれも明治時代に気多大社から任命されている。これら一連の習俗は、国の重要無形民俗文化財に指定されている。



12日早朝、鹿渡島から「鶺鴒道中」が始まる

鶺鴒を捕る鶺鴒捕主任

鶺鴒捕主任を務める小西寛之さんにお話をうかがった。小西さんが、父親から鶺鴒捕主任を引き継いだのは18歳のときで、今年で28回目の鶺鴒捕りになるといふ。

鶺鴒祭は、12月8日にその年

の当番を務める鶺鴒捕部の三人が鶺鴒を入れる籠と御神酒を持って小西家を訪れ、鶺鴒の捕獲をお願いすることから始まる。翌日の9日から小西さんは、鶺鴒捕部とよばれる観音埼灯台のすぐ下の崖に鶺鴒を捕りに行く。出かけるときには必ず一番風呂に入り、身を清めるといふ。到着したら、まず崖を清めてから鶺鴒捕りの作業に入る。12日早朝の気多大社へ向けての出発まで、小西さんの時間との闘いが始まる。

最近崖の浸食が激しく、崖に下りるのがかなり危険になつてきており、命綱のロープを付けるという。平成3年の台風19号以降、森林の倒壊などの影響でしばらく鶺鴒が崖に寄りつかず、出発日になつても捕れないことがあつたという。そのようなときは、気多大社から宮司が祝詞を捧げに来たこともあつたそうである。

鶺鴒道中

鶺鴒捕部の仕事は、鶺鴒を運ぶ籠を作り、小西家に鶺鴒の捕獲をお願いに行き、これを当番の三人で気多大社まで運ぶことである。

鶺鴒捕部が、鹿渡島を出発して、気多大社にたどり着くまでの二泊三日の道のりを「鶺鴒道中」といい、冬の風物詩として親しまれている。三人のうち一人が御幣と榊を立て



小西家から届けられた鶺鴒が入れた籠



観音埼灯台と鵜捕崖

は人々が待ち受けて鵜に手を合わせたり、もてなしたりする。13日には、所口町の気多本宮神社で神事が行われ、その日は中能登町の鵜家^{ういえ}家で宿泊し、翌14日に羽咋市の気多大社に到着する。

長年、鵜捕部の取りまとめ役を務める山口一義さんにお話をうかがった。山口さんは、鵜捕部として10回、気多大社へ赴いている。鵜様道中では待ちかねた沿道の人々に歓迎され、鵜捕部にとっても待つていくれる人がいることは、とても励みになるといふ。行く道中の地域によつては、「今



鵜様に手を合わせる人々 (資料写真：平成12年撮影)

た籠を背負い、一人が賽銭を受け、もう一人は、「うっとりべー、うっとりべー」と先触れをして道を進む。沿道で

年の鵜は腹が白いから大雪やなあ。などというところもあるらしい。

また、道中で鵜が籠から飛び出して田んぼに逃げ込み、追いかけて回した末にやつと捕まえ、道中を再開したこともあったという。山口さんは、この祭りを「暗闇から暗闇の祭りや」といった。たしかに、12日の早朝に出発し、16日の神事も未明であることを考えると、神秘的な部分が多いように感じられる。

鵜捕主任と鵜捕部の人々は、気多大社へ無事に鵜が運ばれてやつと任務を果たすことができたことと安堵するそうである。16日の祭り終了後は、地元に戻り関係者が集まって直会が行われる。

今回感じたことは、鵜祭は大変貴重な祭りにも関わらず、ごく限られた人々によって支えられているということである。鵜捕部の家々は、少子高齢化による後継者問題を抱えているという。鵜祭をはじめ地域の祭りは、維持していくことが大変難しい時代背景となっているが、貴重な財産としていつまでも守られていくことを願いたい。



参考資料：七尾市の文化財

DATA
鵜田宛行状

天正13年(1585)、前田利家が鵜祭神事の扶助として鵜浦の有力者であった鵜浦ノ衛門に二反の田地(鵜田)を与えている。鵜田は現在も鵜捕部の人々が毎年四人ずつ交代で耕作している。

この書状は、山口一義家に保管されている。